

日本における対人関係面の適応のための異文化間ソーシャル・スキル

—異文化環境で在日留学生在が用いた対人関係の形成・維持・発展に関する方略—

田 中 共 子

要 約

日本において日本人と対人関係を開始し発達させていくために留学生在が用いた方略について述べる。対人関係面において良好な異文化適応を果たしていると思われる16人(男10、女6)の留学生在に面接調査を行った。先の調査にもとづき設定した設問をもとに聞き取りをし、内容を簡潔な単文にまとめてKJ法で整理した。得られた1193項目から、対人行動上の困難の6領域に関する行動・認知面、友人作りの行動・認知面、異文化適応の認知面の項目が整理され、それぞれ図式化され適切なカテゴリー名が与えられた。さらに特徴的である具体的な事例についても記述した。これらは日本人との対人関係に必要なとなるソーシャル・スキルについて、具体的なデータを提供するものである。

【序】

対人関係を成立させ、維持し、発展させるための行動の様式を、成功する対人的コミュニケーションの方法としてとらえて社会的技能(ソーシャル・スキル)と定義すれば、それは観察・測定・訓練が可能なものとしてとらえることができる。ソーシャル・スキルとは、誤解のない相互理解を築き、相手から好意的な反応を引き出し、不快な反応を避け、建設的な対人関係を築くためのコミュニケーションの技術である。その対象とされるのは狭義には外見的に明かな行動として発現された行動の次元であるが、広義の場合にはその行動様式の理解や認識、態度や姿勢までを対象とする、認知の次元をも含む概念となる。

対人行動の様式には文化による違いがみられるが、今日世界的な流動性が増し、異文化圏の人々とのコミュニケーション能力が問われる中においては、行動様式をソーシャル・スキルとしてとらえ、問題を解決可能なものに分けて考える行動療法的視座で把握することは重要な意義があると思われる。対人行動をいくつかの要素やプロセスに分けて考えると、社会的文脈(ソーシャル・コンテクスト)を判断し、適切な行動を選択し、それを実行し、さらに相手の態度に応じて反応を調整していくプロセスを想定することができ、相手の行動を誤解なく解釈したり、額面通りの表現を越えて非言語的なメッセージを受け取り解読する、あるいは発するといったような能力が注目される。たとえば、Perceptive skills, expressive skills, conversational skills, assertiveness, emotional expression, anxiety management, affiliative skills の7つのスキルを測定し、訓練し、高めることが可能であるとしたArgyle(1979)の試みなどがあげられる。行動理論

本研究の一部は、1991年度松下国際財団の研究助成(代表・藤原武弘)を受けて行われた。

(Behaviorism)においては、行動は後天的な学習によるものであり、再学習は常に可能で、欠損しているスキルは単に学習の機会が得られなかったものにすぎないと考えられる。学習によって行動レパートリーを拡充させることは、常に可能とみるのである。社会的有能さ (social competence) の評価や社会的不適切さ (social inadequacy) の治療の研究では、対人関係のスキルを習い損なった人を社会的に不適切な人ととらえ、この非有能さ (incompetent) が、自国や自文化を離れた新参者にも共通するものであるとみるなら、臨症的な介入による学習が可能になる (Furnham と Bochner, 1986)。ここでは行動の学習は行動の選択肢の増加であり、アイデンティティを脅かすものではなく、むしろ選択の自由を保証し、主体的な適応的行動を可能にするものであると考える。これは、語学を学習することによって使用可能言語が増えた場合に、それらを選択して使用することと変わらない。

異文化適応のためのスキルの選定の方法についてだが、スキルには文化特定のものと汎文化的な文化一般のものとが考えられるので、両方を含んだ実際の社会的困難や問題解決と関わるものを取り上げる必要がある。スキルの選定のための研究をする際には、特定の文化圏から特定の文化圏への適応を取り上げるのが被験者を均質にする方法なのだが、適用範囲を広くとるためには特定ホスト国への適応一般を取り上げることもできる。その際は、被験者が多様であることを考えて、属性による検討や欠損スキルのアセスメントなどに特に注意を払う必要がある。従来文化一般のスキルについては、国際性の研究や異文化で適応する性格傾向の研究 (近藤, 1981) など、認知的な側面を中心とした研究の中でとりあげられている。また文化特定のスキルの研究にあたるものとしては、特定ホスト国における留学生にとって、どのようなことが社会的困難となるかを調べた報告をあげることができる。Furnham と Bochner (1982) は、英国で質問紙法による調査を行い、社会的困難に6つの因子 (儀礼的關係、親しい関係を作る、公的儀式、対人接触の開始、公的場面での意志決定、主張性) をみいだした。山本ら (1986) は、その質問紙を改編して滞米日本人学生に適用し、4因子 (社交、公共場面、交渉、接待) をみいだした。佐野 (1990) は、同じく改編した質問紙を用いて滞日外国人留学生に適用し、困難度の高い項目 (人を深く知る、大勢の前で話す、目上の人と話す、不満である事を人に伝えるなど) の存在を指摘した。著者らの行った先の調査 (田中, 1991; 田中・藤原, 1992) では、文化特定の困難が6領域 (表現の間接性、社会通念、抑制の効いた自己表現、異性との関わり、外国人の特別扱い、集団主義的行動) に分類された。

これらの調査においては、困難の程度を測定したり分類したりはしているが、どのようなことが実際の対処方略であり、それはどの程度実行可能なのか、またそれをどう教えたらよいのかまでは明らかではない。つまり異文化における対人行動をスキルとしてとらえるには不足である。著者らは異文化適応のためのソーシャル・スキル・アプローチについて包括的な研究をすすめているが、その中で次の3つの次元の調査を実施した。まず、日

本人学生は先にあげたような社会的困難場面でどう行動するのかについて調べた（田中・高井、1991）。日本人学生の行動は留学生のモデリングの対象でもあり、行動の基準ともなるため、その調査には少なからぬ意味がある。次に日本人の行動を細かく認識し熟知しているであろう日本人社会心理学者に、それらの困難についてどのような実行のアドバイスを授け得るかを訪ねた（田中・高井・神山・藤原、1992）。彼らを選んだのは、彼らが大学教官であり、留学生に期待することや望ましいと考えるものを具体的に述べたり、外国人や一般の日本人が思い至らないような細かなアドバイスをすることが可能であろうと考えたためである。ついで本稿に述べる調査が行われた。本報告では、すでに日本に良好な適応をしている留学生が、どのように困難を解決しているのかについて調べた結果を報告する。この調査のねらいは、実際に良好な適応を果たしている留学生から具体的に実施している対策を聞くことで、可能な対処や行われ易い対処はどういうものかを知ることができると考え、それを明らかにしようとすることである。また認知行動療法の技法として学習セッションで用いられる役割演技の際に参考になる、具体的事例を集めることもできよう。さらに、社会的困難を解決する技能を、日本人が思いつくままに即プログラム化すると同化主義的な教育と批判される恐れもあるが、留学生が実施している対処の範囲と内容を把握し、それをもとに学習を組み立てることによって、より適切で無理がない課題設定にしたと説明できよう。

彼らに体験を十分に語ってもらいかつ言葉のハンディを補うために、調査では自由記述質問紙と個人面接法を併用し、日本語と英語の両方を用いた。調査対象者には、日本語の会話能力が十分にあって、日本への関心や適応意欲が高いと思われる日本語・日本文化研修生を中心に選んだ。聞き取る事柄は、小段階方式のスキル学習に活用できるような具体的な行動を述べた行動面と、認知的再体制化に関わる認知面の両方をカバーし、それらを小項目にわけて扱ってデータ整理を行った。こうして認知行動療法のパラダイムで活用できるような、スキルリストのもとになる情報を得た。また断片的な行動リストにとどまらずに具体的なイメージを持って問題解決を指導できるように、プライバシーに配慮しながら事例について記述する。

すなわち本研究の目的は、日本における社会的困難の対処について外国人留学生に聞き取りを行い、行動的・認知的な対処方略を明らかにすることである。これは学習すべきソーシャル・スキルを選定して学習課題を整理するために必要なプロセスと位置づけられる。

【方 法】

調査対象者：日本のさる国立大学の留学生 16 人（男 10、女 6）。出身地の内訳は、東アジア 2（韓国 1・中国 1）、東南アジア 6（タイ 3・インドネシア 3）、西欧 7（アメリカ 1・ニュージーランド 1・スイス 1・ベルギー 1・ポーランド 1・ハンガリー 1・旧ソ

連1)、中南米1(メキシコ1)。年齢は21才から28才まで、平均年齢は24.1才(SD2.60)。学籍は日本語日本文化研修生14、文科系研究生1、理科系研究生1。入学時期は1990年10月。日本語による会話能力が十分にある者で、日頃接する大学教官からみて、比較的日本への関心や適応意欲が高く、良好な異文化適応を果たしていると思われる者を選んだ。使用言語は主に日本語、必要があれば補足的に英語を用いたが、英語が母国語の者は回答にあたって英語を主に用い日本語で補足した。

調査方法：調査時期は、1991年2月から4月。調査の目的を説明の上、学生にふりがなつきの日本語で書いた質問用紙を手渡し、あらかじめ記入してもしなくてもよいが、持参して口頭で回答してくれるように依頼し、予約制で面接を行った。

質問紙：先の調査(田中、1991；田中・藤原、1992)にもとづき日本人のコミュニケーションの特徴として6つの領域を設定し、それぞれ気がついた実例をあげながら、それに対しどう考え、どのように行動しているのかを述べてもらった。設問は以下の通りである。

1. 「日本人は間接的な言い方ややり方をし、あまりはっきり物を言いません。自分の意見もあるかないかよくわかりません。建て前や遠慮などは、本心と違う事を言っているようです。こういうやり方に出会った事がありますか。これはよく外国人との間で誤解を生みがちですが、あなたはどのような対策を行っていますか」

2. 「日本には、日本的な礼儀や社会通念が、いろいろあります。挨拶や、目上の人への態度など、守る事で良い社会人として見てもらえる事がいろいろあります。あなたが特に気をつけて実施している事は何かですか」

3. 「日本人はまじめでありあまり余暇なども楽しまないといわれています。感情表現も、あまりおおらかにはしません。初めて会った人とも、すぐに打ち解けたりはしないようです。あなたが、日本人は開放的でないと感じる事もあるでしょう。気がついたことを挙げてください。また、あなた自身はそれとどう折り合いをつけているのでしょうか」

4. 「日本人の異性への態度や異性とのつきあい方は、積極性、開放度、女性へのマナーなどを始めとして、いろいろとあなたの文化と違うものがあるでしょう。どういう点が違いましたか。例をあげてください。また、これに関して、あなたは日本に来てから、何か自分の考え方や態度を意図的に変えましたか」

5. 「日本人は外国人に対して、特別の態度をとるようです。あなたが出会ったものとしては、どんな事がありましたか。また、あなたはそういうことに出会ったときには、どう考えたり感じたり行動したりしていますか」

6. 「日本は集団主義的な国で、みんなて同じことをしたり、同質の人がかたまりがちだったりだったりと言われています。あなたがコミュニケーションをするときに、これらが妨げとなったことはありますか。あなたは、どこまで同行動をとりますか」

最後に以下の補足の設問をつけた。7. 「他に、あなたが気がついた、日本人の対人的なコミュニケーションのやり方があれば述べてください」

さらに総合的な質問として、以下の2つを設定した。8. 「あなたはどのようにして日本人の友達や知り合いを作っていますか。工夫していることや、うまくいく方法があったら書いてください」9. 「あなたが本国を離れて外国である日本でやっていくために、また、異文化でコミュニケーションしていくために心がけていることがあったら書いてください。また、あなたが述べたいと思う感想や意見がありましたら何でも書いてください」

面接：設問にそって学生に回答と説明をしてもらい、面接者が確認の質問をしながら記録をとる個人面接を行った。面接時間は一人30分から2時間30分（平均約1時間半）であった。

回答の整理：まず学生が語った内容をすべて箇条書きにした。そこから、留学生の日本適応を促進すると思われる行動面のソーシャル・スキルと、行動の解釈や行動への姿勢を述べた認知面のスキルを選び、重なりを省いて簡潔な表現にまとめたカードを作って、KJ法で分類した。すなわちカードを用い、質的な類似に基づいて内容を組にしていき、さらに大きなグループとしてくくってまとめていくという手順をとった。他の感想や意見、問題の実例、自国のやり方の説明などは、この分類方法を行わず面接記録をデータとして用いた。

【結果】

述べられた内容をひとつずつ書きだしたところ1193項目あり、その中から重なりを省いてカード化したのは、6領域の行動面97項目、認知面77項目、友人作りの行動面86項目、認知面45項目、異文化適応の認知面67項目であった。各領域毎にKJ法の結果を示し（図1から図8）、出身国と対比した認識や感想を含む具体的事例（カッコ内は出身地域を西洋かアジアかにわけて示した）を以下にあげる。

1. 間接性（図1）：行動面では対応の技術、主張性を控えること、認知面では非言語的メッセージの受け取りと相手の態度を適切に認識することがあげられた。事例としては、以下のようなものがある。

事例1-1（アジア） アジア人として自分も同じことをする。相手の考え方に適応する仕方として役に立つ。質問にも、ちょっとね、いいじゃないか、そうですね、などと対話につれて相手に合わせ、肯定的に変化していく。だから意見を聞くときは、答が思うよりでなくとも対話をやめてしまわずに聞きだそうと続けることが必要だ。コーヒーを勧めて遠慮されてもさらに2、3回は勧めたほうがいい。母国でも最初は2、3回遠慮するものだ。

事例1-2（西洋） 図書館で勉強中の人を邪魔して質問したら、嫌な顔もせず時間をとってくれた。自分なら集中したいのでと断るだろうに、日本人は忙しくても頼みをむげに断らない。前に翻訳を頼まれてははっきり断ってしまって悪いことをしたと思う。日本では自分が引いたら相手も引くが、母国では強く出られてしまうので自分も戦う準備をするし、母国ではしてほしい事とほしくない事ははっきり言って、言わずに分かってもらう

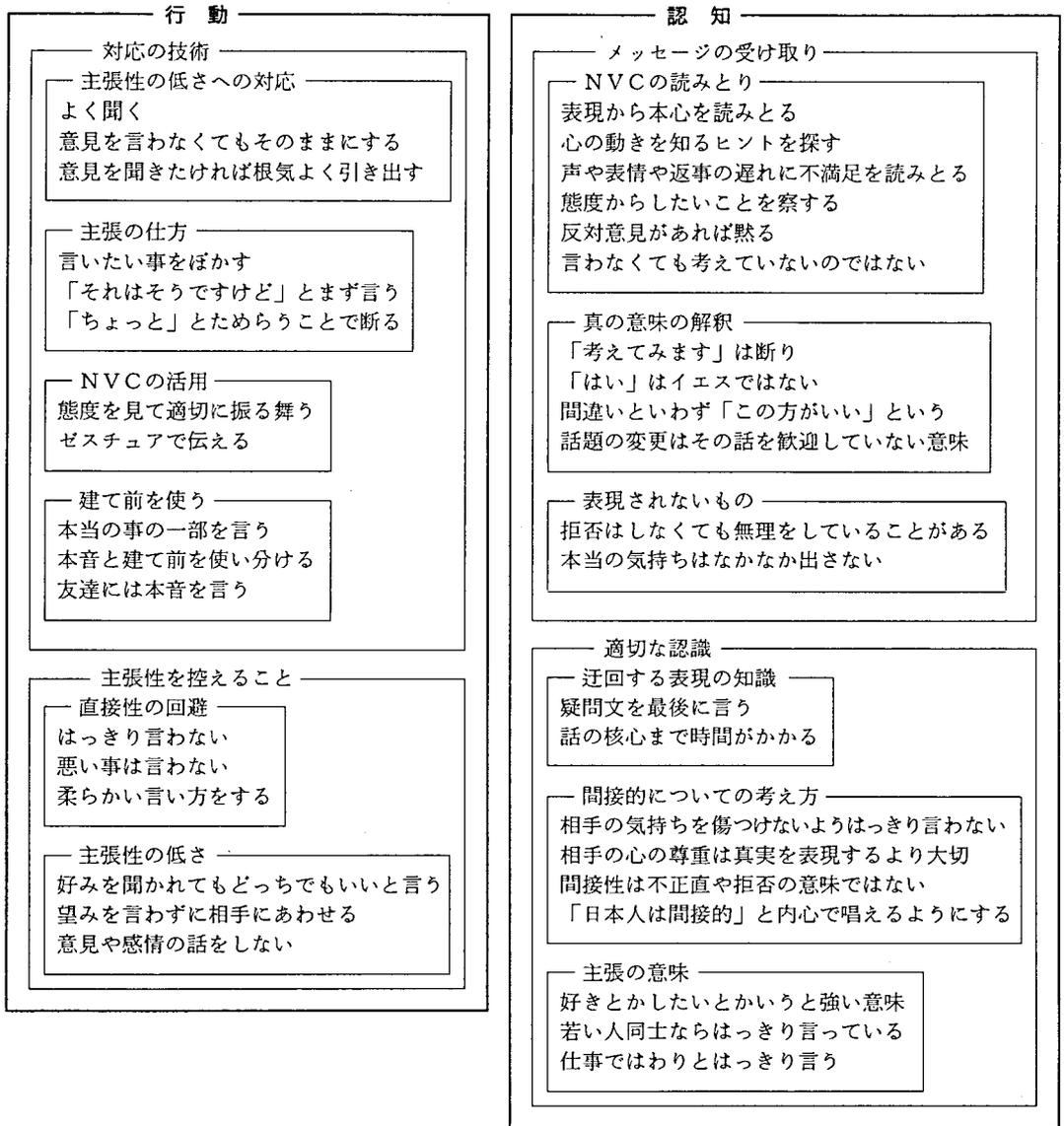


図1 間接性

期待などはしない。日本人はというと間接的で静かな圧力をかけてくる。前にお稽古事の時間なのでホールを出てくれと人に言われたとき、その人は自分ではなく日本人の友人にだけ向って言ったので、無視されたみたいと感じた。直接話すチャンスがないとはぐらかされた感じで、正直さがないと感じる。しかし直接言う失礼を避けたのだとしたら、かえって配慮したのだということになる。間接性の持つ意味が違うと分かった。

事例1-3 (西洋) 訪問先でコーヒーか紅茶かと聞かれたが、そのとき相手はすでにコーヒーを入れていた。母国ではそれでも紅茶がほしければ言うが、日本ではこうなったら言わない。日本で飲物を聞かれたらどっちでもいいと言うようにしている。前に何が食

べたいと聞かれててんぷらと言ったら、次から毎回出てきた。あえて言えば、それは強い意味になってしまう。何でもいいとか、どっちでもいいというほうがよい。母国では自分のしたいようにするので何をしたいかははっきり言うようにしているが、日本では言わない。大きい事でなかったら相手に従うようにしている。小さな事ならそれほど不快ではない。日本ではむしろ、相手のすることを見て何をしたいのか察するようにする。

事例1-4（西洋） 外人も思ったことを全て言うわけではないが、日本人は直接の答を避けて表情とかで表現している。表情や答のなさから、何かがあって満足していないのだと悟る。声や顔を見ながら嬉しそうか満足しているか気をつけている。相手の気持ちを傷つけないように、考える事をはっきり言わないようにしている。返事をする時も、相手に配慮して、それはそうですけどもとか最初に言う。疑問文が最後に来るのも日本的だが、時間があればかまわない。慣れていないと、変とかおかしいとか考えてしまうけれど、一緒にたくさん時間を過ごせばいろいろと理解できてくる。

2. 社会通念（図2）：行動面では礼儀、社会的品格、社交に関するもの、認知では行動の解釈や寛容さの認識、学ぶ姿勢についてあげられた。

事例2-1（アジア） 母国のお辞儀は手の重ね方で場面や対象を区別し、お辞儀しながら相手の目を見ると失礼にあたる。日本では目を見て、30～40度という母国では深すぎる礼をする。電話をする時は、母国ではあいづちは話の邪魔だが、日本ではそれがあつた方が話し易いようなのでしてあげる。

事例2-1（アジア） 先生との挨拶には尊敬語が必要。どこへ行っても何回も、失礼します、すみません、どうもごめんなさい、おじゃましますと言う。挨拶にしても、話すときやもらい物をしたときにせっせと頭を下げたりして、遠慮深い態度をする。それをフォーマルすぎると感じる事もあるが。

事例2-2（アジア） 母国の人も遠慮がちで、初対面の人や新しい友人には間接的な言い方ややり方をする。しかし母国には先輩後輩はない。礼儀や目上への態度は似ているが、日本の方がきちんとしたやり方だ。母国ではこんにちはもこんばんはもさようならも同じ言葉だが、日本では会う、別れる、やすむなどみな別の言葉だし、何度もお辞儀をする。母国でも目上には肯定的な返事をするし、先生とは気おける緊張した関係で、深い関係にはならず仲良くもない。母国でも黙ったままだが言いたいことは分かるという場合がある。

事例2-3（アジア） 母国で茶菓子を出されたら、地域によって、全部飲み食いしないと失礼なところと、したら失礼なところとがある。自分達は地域によって行動や考え方の差があることに慣れている。

事例2-4（アジア） 初めまして、どうぞよろしく申し上げます、ご苦労さまでした、お疲れさまでしたなどは日本では決まり文句の挨拶だ。いただきます、ごちそうさまは、主に子供に言わせているようで、大人はあまり言っていないみたいだが。

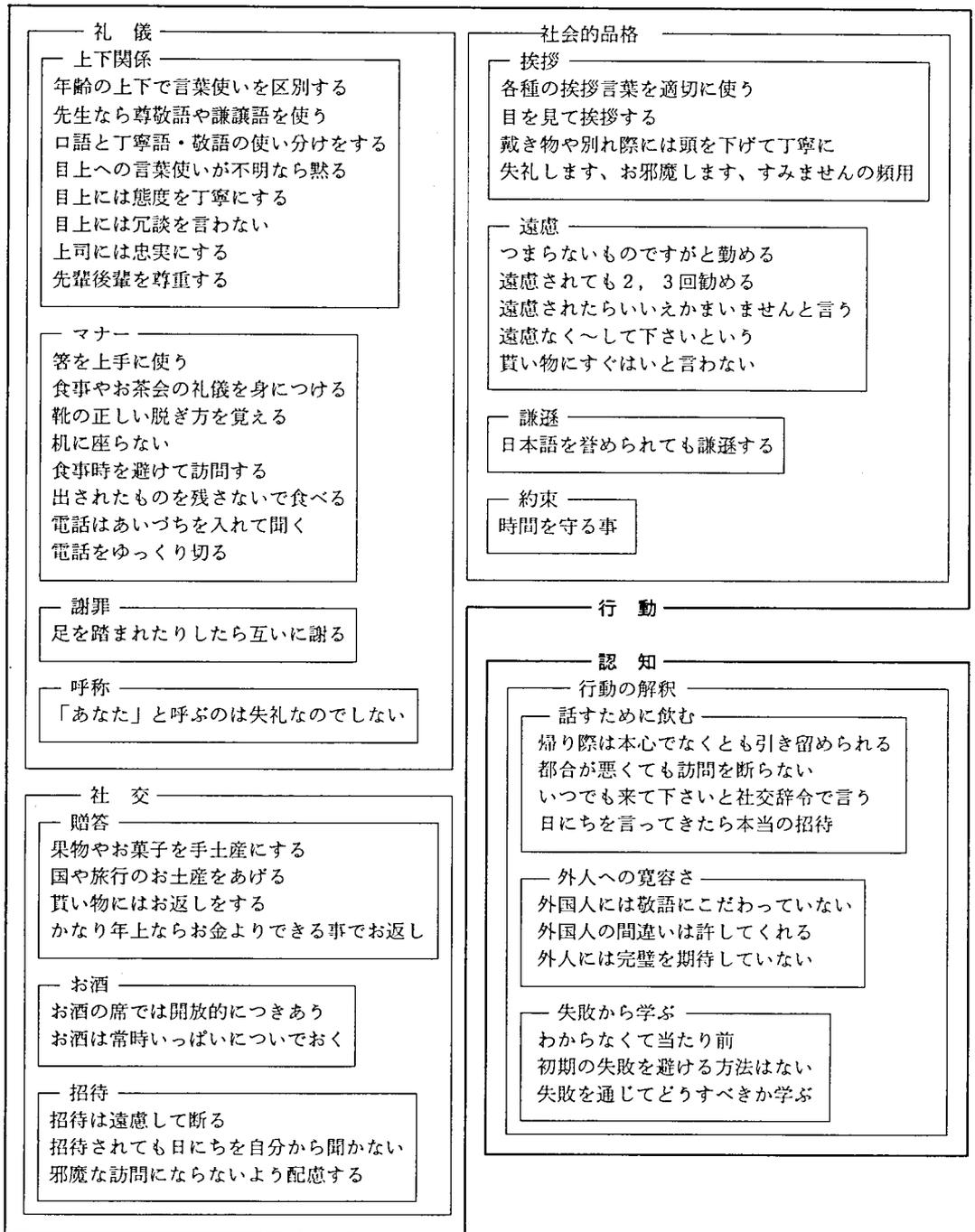


図2 社会通念

3. 抑制の聞いた自己表現 (図3) : 行動面で身体接触や感情表現の抑制、呼称、認知面で感情の表現や理解と容認の姿勢があげられた。

事例3-1 (西洋) クラブに入ってもなかなか打ち解けずに、2~3週間一緒にやっ

と2～3人親しくなったが、酒の席では開放的になった。酒が飲めなくてもコンパは楽しい。みんなが酔っぱらうとスムーズにつき合える。

事例3-2（西洋） 初めての時は日本人は会話で悪い事をあまり言わないので、自分もネガティブなことは言わない。こちらが言えばむこうも意見は出すが、日本人からは言い始めない。でも大学の周辺が田舎だという悪口の話くらいは、日本人とも言い合うことがある。

事例3-3（西洋） 欧州人は内面の深い事を話したいときは表情を多すぎるほど使う。日本人は内面の感情をあまり探りたくないのだろうか、複雑な感情表現があるのだろうか。日本人同士は同じやり方だから問題ないかもしれないが、外国人には複雑な仕組みは分からないから、深くふれあうには不利だ。日本では、怒るときや反対意見のあるときは無言のようだ。

事例3-4（アジア） 母国ではあだ名が大事だ。自己紹介の時も必ず言うし、それで呼びあうし、名刺にも書くし。幾つもあだ名を持っていて、所属集団ごとにつけてもらったものを使い帰属意識を高めたりする。日本ではファーストネームもあだ名も使わなくて、あなたという呼び名も失礼だから使わず、名字に肩書きやさんだけ使う。

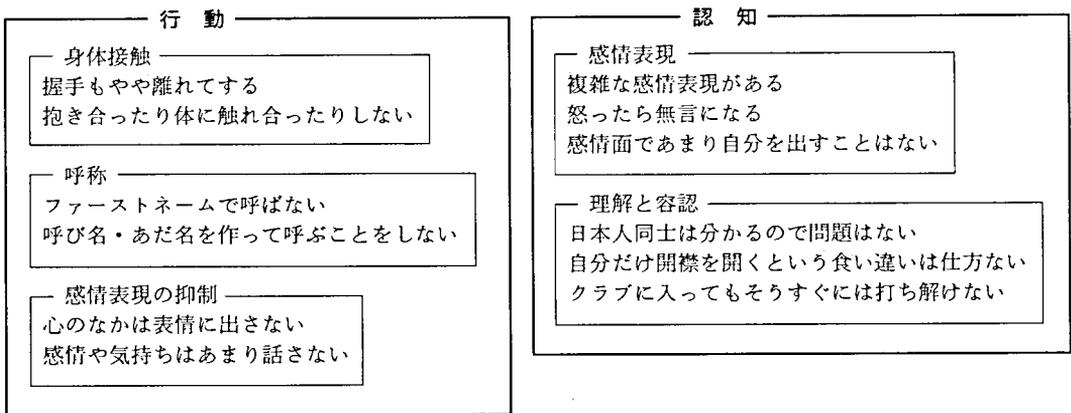


図3 抑制の効いた自己表現

4. 異性（図4）：行動面では行動や表現の様式、確認の取り方、認知面では日本での特徴や普遍性があげられた。

事例4-1（アジア） 母国では高額なデート費用が全て男性持ちなので、貧乏だと恋愛ができないが、それは結婚への投資と考えられる。日本ではそうでもなさそうだ。

事例4-2（西洋） 母国ではもっと男性が女性をほめるしプレゼントもするが、女性から好きとは言わない。日本では女性のほうがよく話すし、好きとも言うし、あまりはざかしがらないようだ。母国では女性には順番を譲ったり、戸を開けたり、道の内側を行かせたりするのだが、日本ではレディーファーストがない。でも習慣なのでつい自分はしてしまう。

事例4-3 (西洋) 日本ではパーティーでも恋人と親しくしてはいけないし、別々に帰る事もある。母国ではそんなにへだてをおいたら怒られる。恋人でない異性の肩に手を回すのも日本ではだめだ。

事例4-4 (アジア) 母国ではデートの際は女の子の家まで迎えに行き、許可を取り、帰りも送って行かねばならず、待ち合わせはできない。母国では学生同士でもデート代は男の子持ちだが、日本はそうでもなさそう。日本の大学の授業で女子が椅子を運んだことがあったが、母国だったら男子がやるだろう。

事例4-5 (西洋) 日本では二人組は恋人を連想させるらしい。知り合いが自分を連れていてだれかに出会った時は、その人に言い訳をしていた。二人でドライブに行くときは、二人の関係が良くわからなかったりしたら、特別な関係でないことを確認したりする。引っかかるところは決まっているのだから、母国のやり方に従ってやるがどうかとか、説明したりするのも面白い。

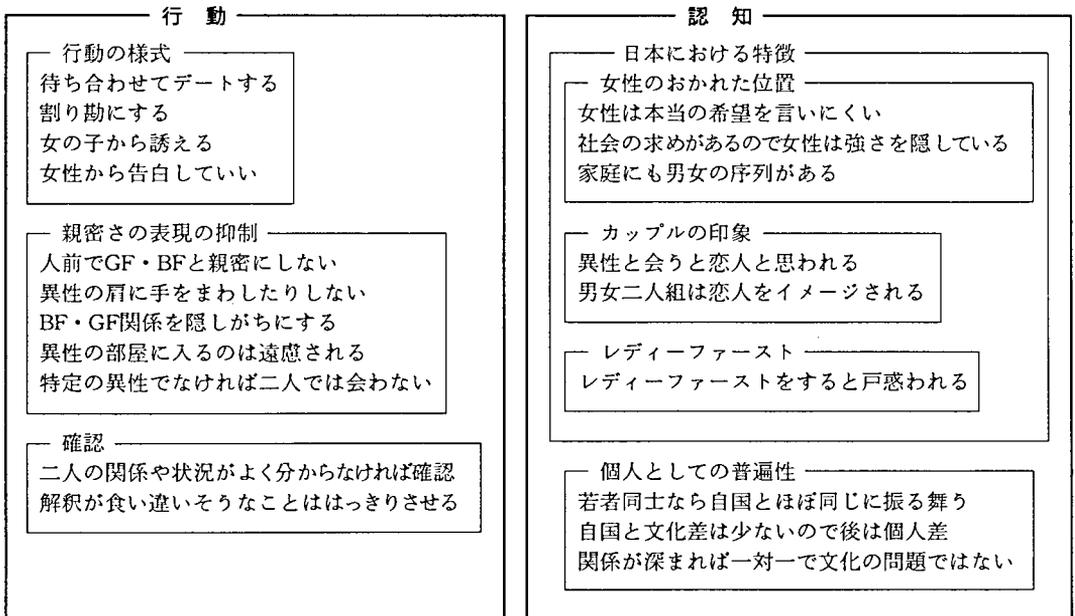


図4 異性

5. 外国人の特別扱い (図5) : 行動面で相手に応じた対応、接近の工夫、相互理解の努力、認知面で特別扱いの認識、言葉の障壁、対処についてあげられた。

事例5-1 (西洋) 居酒屋でからあげをサービスしてくれたりなどいい事もあるし、また悪いこともある。日本語で道を聞いても戸惑って答えてくれない。そういう人は外人なら英語で、自分は英語が話せないからだめと決め込んで、言葉が分からないと思うから分からなくなるのだろう。外人というだけで驚いてしまうようだ。日本語が上手ですねと言われたら、はいでは自慢になるので、まあ何とか通じる程度ですと言う。まだまだです

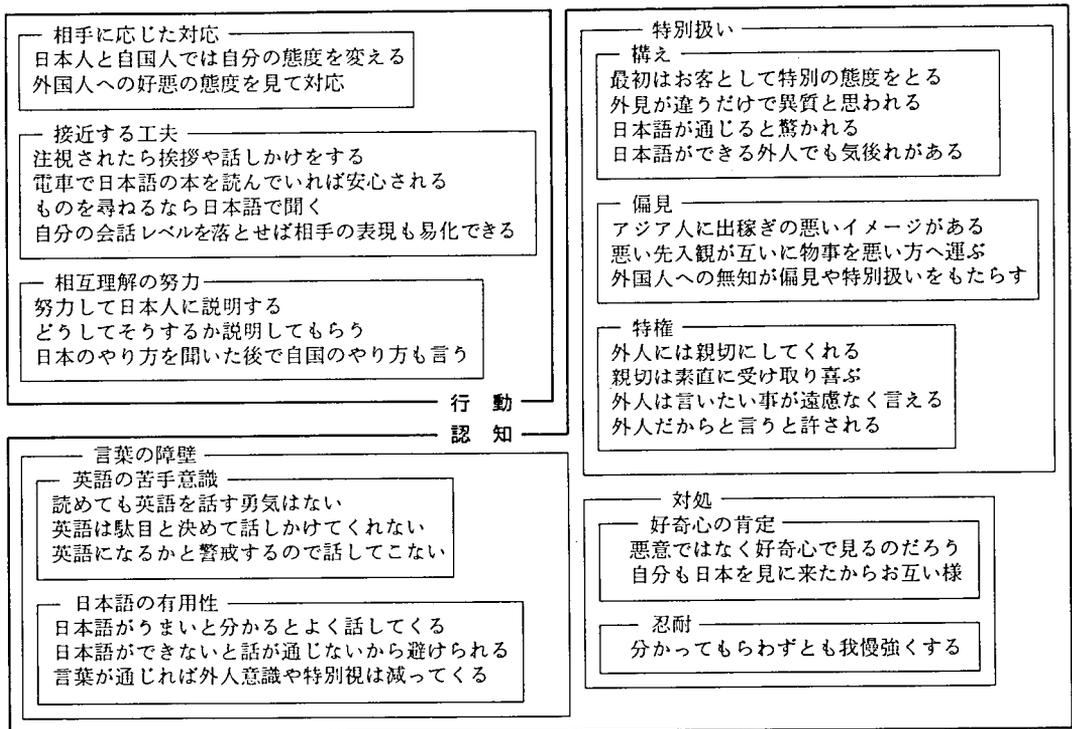


図5 外国人の特別扱い

という英語にしましようとか、異様にゆっくりしゃべってきたりするから。

事例5-2 (アジア) 自分は華僑なので中国人と見られることが多く、日本人は特別の態度を取らないようだ。

事例5-3 (西洋) 西洋人で金髪というだけで違うと思われる。電車の中でもじろじろ見られるが、悪意はないのだから。ただの好奇心だろう。自分も日本を見に来たからお互いさまだ。母国の方が外国人をきらったり警戒したりして、よほど閉鎖的だ。

事例5-4 (西洋) 電車でじろじろ見られるのは、珍しい動物を見るようなものなのだろう。こんにちと言ったり、下車する駅のこととか何かを話しかけて、動物でなく同じ人間だと知らせるようにしている。日本語でものを聞くと喜ばれ、日本語が上手ですね、どこから来ましたか、食べ物に慣れましたかなどと話になる。外人ぼく見えるとまわりの視線が違うので、日本の本を見たりする。そうするとましになる。

事例5-5 (西洋) 母国でも差別はある。でも差別や偏見は無知からくるものだ。日本は長いこと同質社会で外国のことを知らなかったから、そのために特別扱いがあるのではないか。母国では外見だけでは外国人かどうか分からない。最初の挨拶の時に外国から来たとは言いが、後はふつうにしている。日本でも最初はお客扱いだろうがいつまでもそうするのではなくて、同じ人間として扱ってほしい。

事例5-6 (西洋) 最初は特別な態度をとり、何をするかと見守ったり、ふつうの食

べ物が食べられるかとか見守っているみたいだ。言葉が通じて話が通るとわかったら、外人意識も薄れてくる。外国人はいろんな文化の違いがあるから緊張するだろうし特別にも見えるだろうが、言葉が通じれば遠慮しなくなってくるみたいだ。

6. 集団主義 (図6) : 行動面で同調、集団の尊重、主張の仕方、認知面で凝集性、指向性の認識があげられた。

事例6-1 (アジア) 食事に行ってみんながラーメンを頼んだら自分もそうする。外国人は一人ずつ好きな物を選んだりするが、ここでは一人で別の物を選ばないようにする。

事例6-2 (西洋) 日本人学生は友達と食堂に行き一緒に食べる。食堂は大事な場所だ。別々に食堂に行けば別々のままだ。外人もグループに入ってさえいれば、話もできるし行動にも交われる。

事例6-3 (西洋) 人のことをよく考え合うのはよいことだ。社会が問題なく進むから。快適な生活をするためには、他人の迷惑を気遣うのはいいことだ。しかし、十分に思い及ばなかったときは、それは悪い事とされてしまう。いったい日本人は他人への気遣いをどこで学ぶのか。親に教えてもらうのか、自分で学ぶのか。日本に団体性はあると思うが、自分は困った事はない。団地の中にいるときは雰囲気がよく協力するし、離れば自分のしたいことをする。外国人は仕方がないと許されがちだからまったく同じでなくても大丈夫だし、その隙間を利用している。

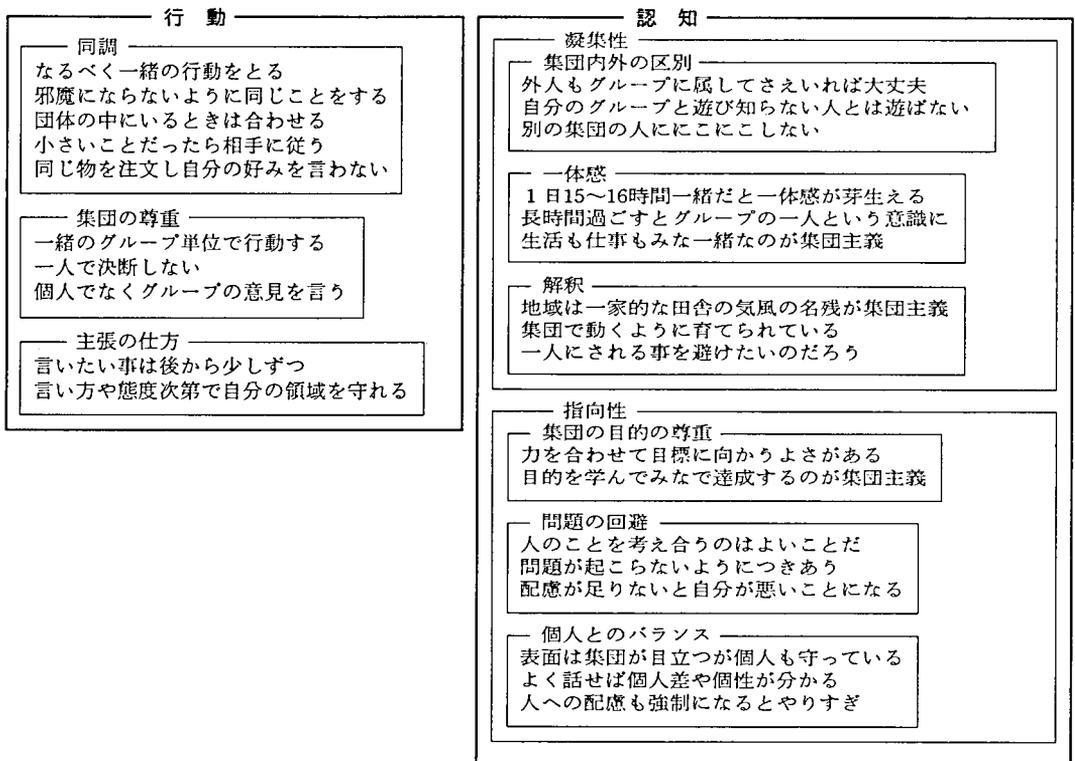


図6 集団主義

友人作り（図7）に関しては、行動面で場の設定、積極性、アプローチの仕方、対話の展開、コミュニケーションの工夫があり、認知面では交友意欲、ポジティブな姿勢、関係性構築の手続き、人による対応があげられた。対話の際の話題としては、図にあげたことの他に、以下のようなことがあげられた。互いの海外体験、共通の興味の対象である文学、仏語など共通の外国語、大学の立地の悪さなどの問題点の共有、日本の習慣の意味、食べ物、仕事のこと、暇なとき何をやっているか、その時着ている物をほめたりどこで買ったかという質問、どこで買い物をするか、若者同士なら自分の将来をどう思っているか、仕事と私生活をどう配分するか、専門の話、母国のこと、文化や習慣の違い、家族のこと、読んだ本の話、地域の話、催し物のこと、TVのこと。

なお、友人作りの困難さについて、以下のような回答があった。「日本では言葉のハンディがあって取るに足らないことしか話せないが、母国では自分の経験や意見、感情などもっと深い事を話しているし、日本でも本当はもっと語りあいたい」（西洋出身者）。「自分だけがオープンで、相手の日本人は本心を出してくれないですれ違いになる。向こうが本心を見せないこっちも助けようがないし、どうしたらいいかわからない。人が自分の機嫌をとってくれるとは思っていない。本当の自分を出さないのがその人のスタイルなら離れるだけ。でも日本人は好きだから、希望を失わないでがんばりたい」（アジア出身者）。

友人作りへの姿勢としては、以下のように述べたものがある。「友達がたくさんいることが大好き。話をするのも大好き。母国でもたくさん友達がいた。母国では日本人の友達がたくさんいたから、日本でももっとできると思っていたのに思ったほどでない。でも接待してもらったときは、お客を大事にしてくれるんだなと分かるからうれしい。母国でもそうするから。日本人と母国人は親切で暖かいところが近いから、さる西洋の国よりも親近感がある。ただこっちでテレビやイベントに出て有名になったから、声をかけられることが多い。自分は有名人になったことなどないふつうの人だから、ちょっと戸惑っている」（西洋出身者）。「英語の友人しか作らないのは、最も楽な方法ではあるが、それでは何も向上しない。炉端焼きでバイトをしていたときには、店員さんとも仲良かったしよく招待されたし、友達には困らなかつた。友達ができれば日本語の練習だって困らない。でもスキーで会った日本人とは、あとで何もしなかつたので続かなかつた。他の友達と一緒に家にきてご飯を食べないか、と招待するのがいい。とにかく何か提案しないと。努力しないとだめ」（西洋出身者）。「人の注目を集めたいという性格だから、一人でしゃべってしまうこともあるが、会話も好きだし、人づきあいは苦痛ではなく、友人作りという冒険や努力も好きだ。自分は人のいいところを見つけようとして話すし、人を尊重している。人はありのままに認める。批判ばかりしては高くならないだけで、自分の方が偉いと思えば人にその姿勢が嫌がられて友達はできない。相手にはいいことを正直に言い、自分の人生の希望や迷いなども話す。忙しいとか関心のない人は相手にしないだろうが、合う人



— 行 動 —

図7 友人作り

は残る。親しくなれば人間同士、一対一なのだ」(西洋出身者)。

接触の機会については以下のような回答があった。「パーティーでは、挨拶だけで2〜3時間だからそう仲良くなれない。それに恥ずかしいとか初対面だから開放的になれないとかで、話したい事があっても出にくいので、何かの活動をする方がいい。国際交流

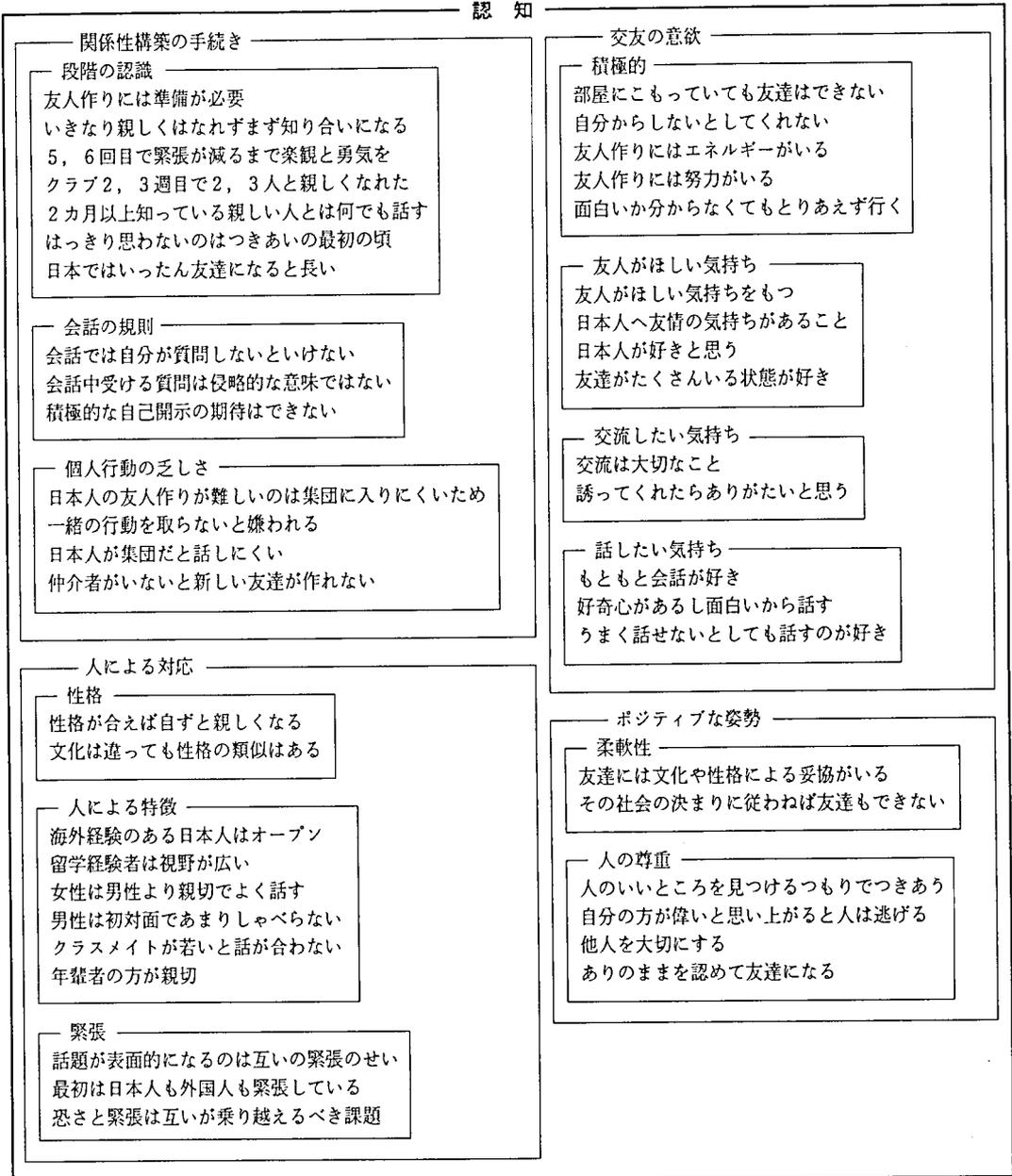


図7 友人作り(続き)

のためでない、自然な企画がいい。日本人は働くのが好きだから、何か仕事をした方がいいだろう。仕事の体験があれば、話も出てきやすい。1～2週間仕事をしたら、心の話とかも出る」(アジア出身者)。「長時間にわたる仕事を長いこととしてグループの一員になりきったら、日本人が本当に分かったし、心底親しくなれた。一丸となって家族のようにまとまり、目的に向かうという日本の会社の体質も知って感激した。それは喜びだった。仲間に会うために会社へ行った。体の疲れなどは問題でなかった」(西洋出身者)。

異文化適応（図8）に関しては、適応のための認識、異文化理解、実践的な適応の努力、ホスト国の肯定、コスモポリタンとしての姿勢があげられた。適応の姿勢について彼らの言葉を引用すると、以下のようなものである。

「母国にいた頃、現地の人と結婚した日本人で、すばらしい人がいた。全ての民族から自由な国際人で、偏見が薄い。自分にとっての一つのモデルだ。自分が来日前に、日本について一般に聞かされていたことや言われていたことはいろいろあったが、自分の目で確かめたら、なんだということもあった。吹き込まれた日本像でなく、自分で理解した日本と、そして理解する姿勢が大事だ。そうやって確かめれば、偏見を越えることもできよう」（アジア出身者）。

「異文化とは一体何であろうか。どこでも人間は人間だし。自分にとっては日本も日本語もつきあいが長くてもう違和感というものがないし、どちらかという困難や工夫を思い出すのも難しくなっている。ただ、日本の集団主義とか出世の仕組みには問題があると思うし、もっと品物中心でなく人間的になったらとか言いたいことはあるが」（西洋出身者）。

「母国の人にアドバイスするとしたら、日本人はあまりはっきり物を言わないのでよく考えて、態度を見てから適切に振る舞うということ。日本人が心がけるべきこととしては、外人は異文化から来たから、時々誤解があるけれどそれを寛容に許してあげるとのこと」（アジア出身者）。

「自分は日本に来て以来オープンになったと感じている。いろいろな習慣を理解して受け入れられるようになった。自分の日本人に対する態度は、オープンにしておくべきだ。批判も大事だが日本では自分の方が外国人なのだ。西洋の影響が大きいとしても、日本の生活習慣は日本人の問題であり、日本人が決めることだ。自分が日本人のように考える必要はないが、日本人の考え方を批判しないで分かりたい。距離は感じて、理解は大事にしたい。アクセプトというのは、批判はしないが距離はあるという状態だと思っている」（西洋出身者）。

「日本はあこがれの国だから、とくに批判することはない。民族間の対立が多くて互いに批判しあっているという国もあるわけで、日本の集団主義は無用の問題が生じなくてよいという意味で否定的には見ていない。尊敬とかの要領も母国とほぼ同じだ。日本に来るなら、まず日常の習慣を頭に入れること。刺身や寿司などの食べ物、お辞儀、身体接触をしない礼儀とか。来日前に文化の予備知識があれば大丈夫だ」（アジア出身者）。

「日本の、人を思いやる習慣が好き。自分は国でもそうする方だった。性格的にそういうところがあったと思う。今は日本人とのつきあいをどんどん深めているが、時々逃げたくなくて旅に出たいと思うこともある。でも自分のしたいことはしており、日本の習慣になくても自分の基準でやっていることもある。外国人であるがゆえの行動の自由は利用している。自由は自分には大事なことから」（西洋出身者）。

— 適応のための意識

— ゲストの自覚

日本では自分の方が外人
自分の方が日本に仲間に入りに来た

— アイデンティティ

もともと自分と日本に慣れた自分の二つの意識
自分は外人だが日本に慣れた外国人
自分が日本人のように考える必要はない

— 意識の変化

まずは日本と同じにしたがる
同じにしたいができないと出づく気づく
やがて日本の長短所が分かって折り合う

— 変化の楽観

やがて言葉は分かるようになると考える
他国と比べて善し悪しがあるとしても慣れる

— 慣れ

3年半のつきあいであるいろいろな当然になった
長く一緒に過ごすと本当に分かってくる
ずっと一緒にいたら慣れた

— 息抜き

相手が外国人なら日本の悪口を共有する
ときどき旅に出たりして逃げ出す

— 立場の利用

外国人として許されるのを行動する
外国人ならでは行動の自由を活用する

— 異文化理解

— 理解

両方の理由を知られば文化の違いが分かる
た見たるのではなく理由を知るようにする
反名したりやったりを分析したりする
始めに思い当たることは結構誤解である
距離はあっても批判せず考え方を理解したい
努力しないといつてもまよそ者のまま

— 違いの学習

外国人との未知の話題は面白い
考え方の違いを面白い話題にする
文化習慣の違いはお互いに知ることが重要

— 柔軟性

自分の考え方を変える
いろいろな考え方や習慣を理解し受け入れる
わからないことと即だめではいけない
自分はやりオオプンになった
受け入れ合う肯定的な態度が第一歩
異文化ゆえの誤解を許す

— 実践的な適応の努力

— 知識をもつ

食習慣など基本的な日常生活をよく知っておく
来日前に文化を習っておく

— 観察と実践による学習

観察して理解したら実際やってみる
自分でやらないと見ているだけでは分らない
周りの人の振る舞いに気をつけ行動を組み立てる
本の知識があってもショックを受ける事がある
深入りしたくないなら結局は分らない

— 現実的な接触

察して初めて深く分かる
日本の習慣が実際に実感として分かった
マスコミの知識だけでなく日本人と実際に話す

— コスモポリタングととしての姿勢

— ステレオタイプ肯定

国民を一般化した質問にはそれぞれだと答える
何人はどうと決めつけない

— 文化相対主義

世界中の文化に敬意を持っていない
どここの文化にも固執したくない

— 人間個人の尊重

人間を尊敬し尊重する
内面外面ともみな違っている

— 対人接触

一人だと寂しくなるので人と会いたい
いろいろな人と会うようにしたい

— 普遍性

人間はどこでも人間だ
どこで暮らしても大変なことはある
現在の幸福が大事

— ホスト国の肯定

— ルールの遵守

日本のやり方方には合わずようりにしている
その社会の決まりを守らねば誤解が生じる
できるだけ真似して摩擦を起こさない
理解できなくても滞在中はルールを守るべき
他国なのだから習慣に従うべき
日本人は日本人だから特別な対策はない
日本人の事は日本人が決める

— 長所の認識

日本の悪いやりの習慣が好き
自国民とは近くて好感を持つ
日本人の生活ややり方が気に入っている
働き者で発眼上手なところが素晴らしい
日本と日本人が好きな
日本はあこがれの民族だ

図8 異文化適応

「慎重にしてみわりの振る舞いをよく見て振る舞う。自分達が日本人の仲間になりたいということであって、日本人が自分達の習慣を知っているはずなのではない。自分達がわざわざこっちに来たのだから、自分達がここの原則を守らねばならない。守るべきルールという考え方は正しかったと思う。守らねば友達になれないし、いつも誤解が生じる。日本人をまねしなければならない。まねても最初は失敗するがそれは避けられないから、そこから学ぶ。どうしてか、どこが違うかと友人に聞けば教えてくれる。自分の考え方を改めて、柔らかく習慣を受け入れていくといい」（西洋出身者）。

【考 察】

日本における社会的困難に関する留学生の対処の仕方が整理された。間接性に関しては、アジア地域ではやり方や考え方が類似であり、さほど戸惑わないと述べた者もいた。一方西洋出身者にとっては、主張性の重要性が逆転しているわけで、これは認知的再体制化が必要な部分である。先の報告（田中ら、1992）では、出身地域と困難についての数量的検討が行われ、東南アジアの学生は間接性に関する困難が低いことが示されたが、今回の面接結果もそれと矛盾しない。NVC の読み取りに関しては注意深く慎重であれというアドバイスが見られたが、読み取り方の手がかかりや、主張の際の柔らかい言い方の型などは、スキル訓練の際に整理して提供されるとよいだろう。主張性など抑えるべき行動に関しては消去も考えられるが、むしろ代替行動や、より穏やかなやり方などをシェイピングして身につけていくほうが、正の強化パラダイムを中心としたスキル学習プログラムには組み入れやすいだろう。

先の日本人学生対象の調査（田中ら、1991）においては、留学生が困難とする場面を日本人学生はどのように処理しているかを調べた。日本人の学生に「あなたに不満があれば相手にどのように表現してもらいたいか」と聞いた場合は、緩衝表現をのぞむ者は30（人）、直接表現は88であった。日本人もはっきり伝えられたい気持ちがあるが、人への遠慮があってなかなかできないということかもしれない。日本人学生はまた、怒りを表現するときは、目上なら緩衝表現、見知らぬ人なら無表現だが、友人なら直接表現をとる傾向にあり、友人関係を築いた上であれば率直な表現を取り入れていくことができると思われる。

社会通念に関しては、自国で習慣となっていることとの対比と整理が個別に必要なようになってくるであろう。特に母国で望ましいとされていたことをしたり、望ましくないと思われることをしたりといった場合に、その違いを明確に認識しておくことが実行の助けになるだろう。そして実践して反応を確認して初めて、その行動の意味が実感できるだろう。不評を買う恐れがあると実際の行動がためらわれると思われるので、一般的な場面への般化に先立って、十分にロールプレイを試し行動リハーサルをするのがよからう。例えば、あ

なたという呼称を英語で使うように日本でも頻用することは、文法的には正しくても社会的な望ましさの観点からは問題がある。これは母国では習ってこなかったことだと言った学生もおり、文法を中心とした語学教育で手薄になるのがこのようなところであるとすれば、行動様式の学習が語学の学習とは別に必要であることを示しているといえよう。敬語については、それが使いこなせることは高度の語学力を持っていることを意味しているようである。しかし外国人ゆえの許しがあることをアドバイスした意見があるのは興味深い。必ずしも高度の語学力を身につけてそれを使いこなさなくても、外国人と日本人との対人関係においては許容されるという指摘なのである。先の日本人教官対象の調査（田中ら、1992）でも、基本的な敬意さえあれば無理しなくてもよいという意見がみられ、このあたりは必ずしも要求水準が高くない寛容な領域なのかもしれない。

抑制の効いた自己表現には、日本のやり方を認識して理解する側面と、自国での習慣を抑制する側面とがある。しかし例えば呼称では、日本のやり方では親しさを伝えるには不十分だと不満を述べる者がいるなど、理解・実行上の困難が認められる。これは先の結果でも滞日年数によって比較的变化しない困難であり（田中ら、1992）、適応までが難しい領域かもしれない。

異性については、最終的には個人の関係になるとしても、接触の仕方や関係の開始、社会的場面での振る舞い方には文化特異的なものがあることを指摘できる。認識のすれ違い可能性があったらそのたび確認した方がよい、というアドバイスは、こうした違いを乗り越えてコミュニケーションするのに有用と思われる。

外国人の特別扱いについては、なぜ特別なのか、各人が各人なりの原因の帰属を行いながら、日本社会の事情に対する理解をみせている。ゲスト扱いに対する感謝ともどかしさが入り混じりながらも、それを自分の働きかけにより解消しようとする努力が見られる。ただしこれは日本人側も訓練すべき課題であろうと思われる。日本人学生は「外国人に接するとき気を配ること」を聞かれ、接触態度として自然体 22（人）、相手文化への同調 20、日本文化への同調 5、文化間の偏見の否定 5 の順に答えており、親切・礼儀・誠実さなどの配慮は 19 であった（田中ら、1992）。すなわち厚遇のみでなく自然にしたい気持ちは、日本人の学生にもある。従って次の段階としては、どのようにそれを発揮させたらよいかを考える必要があるといえよう。

集団主義については、それを批判する者と評価する者がいたが、自国の価値観との対比や、個人的価値観との親和性の程度が影響していると思われる。日本人はこの点については自己批判的になりがちともいえるが、今回の留学生には評価されている面もある。集団性との親和が友人作りのポイントだという意見もあり、日本社会へ受け入れられるかどうかの重要な要点なのかもしれない。留学生は、よくみてみれば集団と調和しながら自分の意見を言う方法や、それなりの個性の出し方も分かってくると述べているが、調和の要領について学習しておくといえよう。

日本人との友人作りが難しいという指摘は過去にもなされてきており、原因については友人形成の仕方や会話の仕方の違いその他の推測がなされている（横田、1991）。しかし、友人を作り得た者がいるとしたら、はたしてどのようにしたのかについては、今回のような整理はまだ見られなかった。今回のデータからは、待つのではなく積極的に自分からアプローチすることが必要ということが読み取れる。もともと友人が多かったり会話が好きだったりといった、ソーシャル・ネットワーク作りに関する個人特性が関与していることも示唆される。日本人学生は、外国人には積極的に接触してきてほしいと思っており、日本を理解して、日本を侮らないで、自文化の事も紹介してほしいと願う（田中ら、1991）。これらの日本人の期待にそう行動をした留学生が、その結果友人を獲得しているということかもしれない。

異文化適応に関しては豊かな認知面での示唆が得られたが、近藤（1981）などを始め従来言われてきたように、好奇心や創造性、柔軟性は共通して必要な要素とみられる。加えてホスト国の肯定的なとらえ方などの要因も、適応を促進しているようである。望ましい認知面のありかたを整理してそれを導くことは、認知行動療法の欠かせぬプロセスであるが、その認知的変化のための効果的指導の方法については、何をどこまでプログラムの対象とできるのかを含めて、さらに検討される必要がある。

今回の報告は事例とそこからのデータの質的検討を中心にしたものであり、示唆に富んでいるが問題発見的な視点にもとづいている。そのため、量的把握が今後の検討課題の一つであるといえる。すなわち、日本人と外国人の認知や行動の期待、実行される行動レベルでのずれなどを把握することが、両者の対人関係形成上の問題点の所在を明らかにし、ソーシャル・ネットワークの成立と維持のメカニズムを解明する助けになると思われる。その修正を目的とした介入を計画し、果たしていくことで、異文化適応がどのような力動を経て達成されて行くか、また双方向性である対人間の交流は、片方からの積極的働きかけの開始でどのようなプロセスを開始するのかが解明できよう。すなわち介入の有無を要因に組み込んだ継時的研究によって、これらは解明されるであろうと思われる。また、対人関係の志向性などの個人特性の関わり方についても、研究の展開が待たれる。

ソーシャル・スキル訓練を組み立てる視点からすれば、今回のデータはまさにスモールステップ形成の課題構成と認知的再体制化のための事例であり、これをもとにして基本プログラムを組み、さらに個人に応じた個別のメニューを組む際に取り入れることができる。異文化適応の方策は、従来多くが概念的な指摘に留まってきた。行動の修正によって問題行動が減じ、成功体験により認知も変化するという方向性を考えれば、行動を手がかりとした介入をどう展開させていくか、きわめて興味深い事といえよう。

引用文献

- Argyle, M. 1975 New development in analysis of social skills. In Wolfgang, A. (Ed.) *Non-verbal Behavior*. Academic Press
- Furnham, A. and Bochner, S. 1986 *Culture Shock*. Oxford: Methuen Inc.
- Furnham, A. and Bochner, S. 1982 Social Difficulty in a foreign culture: an empirical analysis of culture shock. In Bochner, S. (Ed.) *Cultures in Contact*. Oxford: Pergamon Press
- 近藤 裕 1981 カルチュア・ショックの心理：異文化とつきあうために 創元社
- 佐野秀樹 1990 異文化社会への適応困難度に関する研究－社会場面に関する分析－ 行動療法研究 16(1)、37-44
- 田中共子 1991 在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル 異文化間教育 5、98-110
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日外国人留学生の対人行動上の困難－異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討－ 社会心理学研究 7(2)、92-101
- 田中共子・高井次郎 1991 日本人学生の対人行動－留学生の異文化適応指導のための予備調査－ 平成3年度中四国教育学会発表資料
- 田中共子・高井次郎・神山貴弥・藤原武弘 1992 異文化適応のための対人行動－在日留学生の場合－ 平成4年度異文化間教育学会発表要旨集
- 山本多喜司(代表) 1986 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 横田雅弘 1991 留学生と日本人学生の親密化に関する研究 異文化間教育 5、81-97